

氏名	嶋村 薫穂
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	甲第693号
学位授与年月日	令和8年3月19日
審査委員	主査 教授 山崎 修 副査 教授 谷戸 正樹 副査 教授 林田 健志

論文審査の結果の要旨

近年、口腔癌への手術手技や再建術の進歩、放射線・化学療法の導入により、口腔癌患者の生存率は向上している。しかし、治療に伴う器質的変化や口腔機能障害は依然深刻であり、特に口腔機能低下は栄養状態やQOLに重大な影響を及ぼす。これまで、BMI低値が口腔癌治療後の予後不良因子であることは知られていたが、BMIと術後口腔機能の関連は十分に検討されていなかった。そこで申請者らは、口腔癌治療後の口腔機能に対するBMIの影響を明らかにするため本研究を実施した。2019年9月から2023年3月までにNCCNガイドラインに基づく治療を受けた口腔癌患者102名（男性74名、女性28名、平均年齢69.6歳）を対象に、背景データを収集し、治療後退院前に口腔内細菌量、口腔乾燥度、咬合力、舌圧、咀嚼機能、EAT-10スコアの6項目について評価した。BMIは治療前と治療後に測定し、WHO基準により低値、正常、高値に分類した。統計解析には相関係数、分散分析、Jonckheere-Terpstra検定、多重回帰分析を用いた。解析の結果、治療前BMIは治療後の舌圧と有意な関連を示し（ $P=0.01$ ）、BMIが高いほど舌圧が高い傾向が認められた（ $P=0.03$ ）。多重回帰分析でも、BMIは独立して舌圧と関連した（ $P=0.01$ ）。一方、治療後のBMIおよび治療前後でのBMI変化率と治療後口腔機能との関連は認められなかった。舌圧は、原発部位、進行期、頸部郭清、再建術の有無とも関連したが、BMIはそれらの治療要因とは独立して影響を及ぼしていた。

本研究は、治療前のBMIが治療後の多種多様な口腔機能に影響する可変因子であることを示し、治療前からの栄養介入や体重管理の重要性を明らかにした。特に治療前BMI低値群では、治療後の舌圧低下リスクが高く、早期の栄養管理が推奨される。また、とくに再建手術手技の改良や補綴歯科治療（PAP: Palatal augmentation prosthesis）による機能補完も重要と考えられた。包括的な機能評価と個別化された手術治療と栄養およびリハビリ介入が、口腔癌治療後のQOL向上に寄与する可能性が示唆された。本研究は単施設・横断的研究であり限界はあるが、治療前BMIと術後口腔機能の関連を初めて包括的に示した学術的意義は大きいものと考えられた。